大会印象記

大内雅利

私は、今回の第二五回大会で、大会出席も四回を数える。最初は「日本資本主義と家」を共通課題とした遠刈田温泉であった。今年の印象記

ということで承知した文章に、四年前の記憶から筆を始めるのも変な話だが、私の村研に対する印象は、その時の浴衣がけの懇親会と、紅葉する蔵王山と切り離れない、さらに、討論に頻出する日本資本主義という言葉によって、私の印象は十全なものとなる。当時の討論への不満は、事例と日本資本主義――私はこのような方向への論の構成を妥当なものと考える――とが、安直に接着されている点にあった。事例と日本資本主義とを媒介する領域が殆んど実証されていないと思われたし、わずかの媒体を求める試みも雑な感じがした。具体的な事例と抽象的な日本資本主義とが、報告の導入部と終結部とでだきあわせられていたのである。そのような問題はあったにせよ、懇親会と日本資本主義とを両軸とする印象は、その後も続き、今なお変っていない。

これらをもとにして、新たに付け加えられたことは、宿題委員――研究会――大会に連なる論点のしぼり方のたくみさであり、また、同学の人を幾人か知ったことのありがたさであった。前者は、『研究通信』によって詳しい報告が会員に届けられ、誰もがおおよそではあれ論点の方向について了解していることである。これはさらに、村研の課題史――さらに細分した論点史――から言えば、節目をなして、なにほどかの蓄積と発展を促したのである。もっとも、蓄積は各人の頭の中にあるということできわめて恣意的であり、必ずしも合意は要されず、論点がより明らかになったまま残される場合もあった。これらのことが、私が村研に対して抱いていた大まかな印象である。

＊　＊　＊　＊

今回の大会で私が不思議に感じたことは、あまり論点らしい論点がなかったことにある。正確に言えば、司会の蓮見会員が準備した論点に達しえず、最後は「主体的再編」の優良事例で終ったことである。蓮見会員の示した論点は、念のために摘記すれば、議論の前提として、前回の課題である生活破壊との関連および歴史的構成のそれぞれに配慮することがあげられた後に、第一に再編成のさまざまな試みの布置状況、第二に再編成のなされる社会構造（集団をも含めて）、第三に再編成の主体、これら三点であった。さて、私は、優良事例に対しては、農家の先端的な試行として、有用さの点で関心をもっているばかりでなく、さらに、そのとりあげられ方を通して、時の農業・農村・農民問題の配置を検出するあらわれとしても、大切なことと考えている。誰がどのような事例を優良とみなすかは主観的な作業であろう。このような理由で、私は優良事例を冷かすつもりはないし、それらの報告はそれとしてたいへん参考になった。しかし、村研では、優良事例の事例性を越えて、構造的なるもの――曖昧な言葉であるが強いて使用する――へと議論の進展することが望ましいと思う。

この点から反省すべきこととして、課題は言うに及ばず論点においても、もう少し明らかな提出の方法を工夫するということがあったと思う。例えば「ムラは主体的再編成の主体になりえるのか」、「その条件はなにか」、「なりえない理由はなにか」、「その時の主体はどこに求められるのか」、などなど。課題や論点を解決することは、しばしば困難で、時にできないこともあるが、それは限りある人知のゆえに、努力もあきらめもしようがある。しかし、課題や論点そのものがわからないのでは、人知の活きる所がない。

ここに思いおこされるのは、岩崎会員のよせられた昨年度の大会の報告である。「帰途につきながら、議論がかみあいきれなかったのは、なぜ、どういう意味でなのか、を考えた。考えあぐねて、これはやはり島崎報告をなんとか自分なりに〝論点化〟しないことには書きようがないということにゆきついた」（『村研通信』№一〇五）。島崎報告を起点として論点化を試みるかどうかは別として、私もまた、前回には同じような印象を受けた。「生活破壊」の論点が整理され、できればその構造的要因が分析され、それに呼応して「主体的再編成」が論議されることが条理にかなっていると思うのだが、課題をめぐる大会が終了したことをもって、課題は解かれ、次にこまを進めるということは安直にみえる。「生活破壊」も「主体的再編成」も、一回や二回の大会で論点は明らかになりそうにもない。それらがきわめて重要なことであればあるだけ安直さが浮き立つのである。

課題が変わるということには、それなりにいくつかの長所がある。現実の村落の変化は、私達の議論の展開よりも速いだろうし、変化のヴァリエーションは、私達の視野をこえるだろう。また、会員の関心は必ずしも集約されないであろうし、むしろそれは学問の発達に不可欠なことですらある。

＊　＊　＊　＊

「主体的再編成」をめぐっての研究会は、つごう四回ほど開かれている。議論の大雑把な展開は、第一回研究会（東京）において共通課題の「村落生活の変化と現状――その主体的再編成をめぐって――」がきめられ、第二回研究会（九州）においてムラの農業生産に対する順機能が主張され、第三回研究会（東北）において、それは資本主義経済の下では疑問であると反論され、第四回研究会（東京）においては、それは、「あえて結論はつけ」られていない。しかし、この展開の示す論点は、きわめて明らかに、「ムラは生活破壊に抗する主体的再編成の主体であるかどうか」ということになろう。私は、このような論点の提出は、肯定するにせよ否定するにせよ、実証と理論によって精緻に構築されるならば、いかほどかの成果をあげえたように思う。

しかし、「生活破壊」と「主体的再編成」と二課題を並べた場合に、上の論点への収斂がきわめて偏っていたことも明らかである。「生活破壊」の構造的性格が明らかとなれば、それに応ずる「主体的再編成」の主体のありかも変わるであろう。むしろ、妥当性や現実性を考慮することを別とすれば、それは、以前、農民運動、農（漁）業協同組合、労農同盟、革新自治体、共同化などとして提起されることが普通であった。主体がムラとなるように論点が収斂した理由は、一つに、生活破壊について構造要因までおりた整理がされていなかった前年の大会の総括にあるであろうし、二つに〝ムラは生きている〟というイデオロギーに過分に対応した――それは後述するように妥当な面が十分にある――研究会の流れにもあろう。それゆえ、現実の課題報告に農協の事例があらわれたのは、研究会の流れからすれば唐突であるし、主体のありかを示すことからすれば順当な面もある。このため、大会の会場においては、「主体的再編成」の事例として、農協が取りあげられることを納得していても、論点の流れからは準備されておらず聞き置くに終わった。そのことは残念であったと思う。さて、来年度の課題は「農村自治」であるが、

課題の継続性からみて「生活破壊」と「主体的再編成」の線上に行なわれることは推測できるが、「非常に明確」な課題とは思えない。論点を明確にすることを希望する。

＊　＊　＊　＊

大会の課題報告は、『研究通信』に要旨があるので略し、私の感想を述べたい。初めに山本会員の「都市近郊農村における集落機能と農業の農民による主体的再編成について」をとりあげる。私によくわからなかったことは、山本会員はどうも主体的再編成の主体としての部落を考えていないらしく、それを部落とは別の下郷農協で検証していた点である。どうも集落機能と「主体的再編成」は別であるらしい。確かに主体的という場合には、主体の行動する方向ないし理念があるものだが、機能にはそれが欠けている。しかし、「主体的再編成」という共通課題のもとに、研究会で議論されたのは部落だけであり、私は今まで主体としての部落という了解のもとに印象記を書いてきた。このような錯誤の理由は次の点にある。第二回研究会（九州）において採られた実証の構成は、二集落を比較して、経営の違いを部落の違いとして説明することにあり、結論は「きちっとした農業をやろうとすれば、部落があるか、或いは必要である」（山本会員）ことであった。おそらく、これは実証されるだろうが、これはさらに部落だけが農業生産に必要であることを意味しないし、また常に「集落が農業生産と農家生活に不可欠の補完機能をもつ」ことをも意味しない。「補完機能」は、ない場合をも含めて強弱があるのであって、だからこそ、「部落があるか、或いは必要である」と帰結されるのであろう。これはまさに「主体的再編成」そのものである。私は、部落だけをみた場合には、以上のことは正しいと思うが、それは、「主体的再編成」のすべてではないし、むしろ全体として考えれば逆機能として作用する面も十分に考えられる。かぎられた事実からすべてを導くことは誤りであり、不明瞭な論旨はしばしば現実においてイデオロギーの好餌となる。ムラは生きもするし、死にもするのである。

次に岩崎会員の「みかん旧産地における村落生活の変化と現状」を一瞥する。私は、この報告が「主体的再編成」の主体を明示していないこと――しかし平均的農村においては最も実情に近い――を残念に思い、またその前提となる「生活破壊」については、事例とみかん市場とを媒介する生産費の分析がないことに不満を感じた。私は、地域社会や村落を考える場合に、それらを超える市場構造や国家の政策はきわめて重要な契機だと思うのだが、この報告構成では、市場構造は村落のレベルにおいて生産費に集約的にあらわれるはずである。これを明らかにすることによって、旧産地――このことを私達は常識として知っているが、それと実証することとは別である――の構造的弱点を、みかん市場のなかに位置づけることができる。冒頭に述べた事例調査と日本資本主義の媒介とは、例えば以上のようなことを指している。最後の佐藤会員の「村落の主体的再編成と農業協同組合の機能」を、私はもっとも興味深く拝聴した。報告者に対しては、農協論の準備がなかったことを反省したい。

＊　＊　＊　＊

これを書くにあたって、私の実際の思考は、大会の課題報告を読み直すことが、四回の研究会をもう一度おさらいすることに連なり、それはさらに、村研を想いおこすことへと自然に広がっていった。というのは、

私は言ってみれば村研の三代目である。村研の創設者を一代目とし、現在の活動の中心となる会員を二代目とし、三代目はたかだか五年程度の会員歴で、西も東もよくわからない。そこに地図を必要とするゆえんがある。一代目の創設者は戦後に多くの共同調査研究を行ない、また時代の思潮も均質的で、事例や方法を共有する面がたぶんに多かった。二代目は早くも分化するきざしをうかがわせているが、創設者を介しての共有性は残している。しかし、三代目の私は、懇親会において情緒を共有するにしても、村研の蓄積を共有――理解の程度ですら――するにいたっていない。例えば、村研年報の末尾には、史学・経済史学、経済学、社会学、法学や民俗・民族・文化人類学におよぶ各分野の研究動向がのっている。確かに一代目の創設者はこれらを統合しつつ、村落に研究の焦点を合わせることができたであろうし、また現実的な関心や理論的な枠組もそのことを要請していたのであろう。私はこのような状況から、いかに離れていることであろうか。私の村研においての位置は以上のようなものと自認しており、そのような立場からの大会の印象記は、報告者にはたいへん申し訳ないが、報告をこえて村研にまでいたってしまうのである。紙数も尽きたので、最後に、舌足らずの部分が多々あるにしても、三代目の印象記として、会員の御寛怒を願いたいと思う。